Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-20

書評 ： 長濱拓磨著『遠藤周作論 ： 「歴史小説」を視座として』

越田, 早央里

(Citation)
國文論叢,55:144-147

(Issue Date)
2020-03-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/E0042063

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0042063

【書評】

長濵拓磨著

『遠藤周作論―「歴史小説」を視座として』

越田　早央里

長濵拓磨『遠藤周作論―「歴史小説」を視座として』は、遠藤周作が評論家としてデビューしてから、完結した最後の小説である『女』まで、約五十年に及ぶ遠藤の文学的営為を、「歴史小説」という観点から、初めて本格的に論じた研究書である。従来の研究では、『沈黙』や『侍』をはじめとする個々の作品については詳細に論じられてきたが、それらが包括的に「歴史小説」として扱われたことはない。本書では、『沈黙』以降数多く出版された遠藤の「歴史小説」と、彼の文学的出発点である評論や初期小説群との関連について詳細に論じるなど、新たな角度から遠藤文学の読み直しが図られている。

本書の対象となる「歴史小説」には条件があり、「はじめに」で㈠遠藤が定義するキリシタン時代を背景とすること㈡作品の舞台が、日本あるいは日本人が活躍した場所であること㈢主人公が日本人あるいは日本人とかかわる人物であること㈣主人公がキリシタンあるいはキリシタン、キリスト教と深くかかわる人物であることとしている。そして、以上の条件に当てはまるものであれば、㈤ジャンルを問わず「歴史小説」として扱われている。

本書は四部から成っており、それぞれの部が四から五の章によって構成されている。この構成は遠藤がどのような「歴史小説」を発表した時期かという観点から区分けしたことによる。すなわち、遠藤が「歴史小説」として「切支丹物」を主に発表した時期を第一期、「評伝」が主だった時期を第二期、そして「歴史群像」発表の時期を最終期とし、それに「切支丹物」以前の「初期作品群」を加えた四つの時期に分けて検討している。

第一部は「「歴史小説」への序章」と題され、遠藤が評論家として出発してから小説の道へ進み、『海と毒薬』を発表するまでの時期に焦点があてられる。ここで問題となるのが、遠藤文学の特徴の一つともいえる「手記」、そして「トポス」の二つである。

第二部は『沈黙』をはじめとする「切支丹物」についての論考である。ここでは詳細な史料との対照を経て浮かび上がってくる、遠藤の創作の軌跡がまとめられている。また、遠藤文学のテーマとして知られている「弱者」を、対照項である「強者」と並べて検討している。遠藤自身も言及することが多い「弱者」ではなく、あえて「強者」にスポットを当てることによって、「弱者」の再

解釈が可能となっている。

第三部では、遠藤が「神に成り代わる所業」（『人間のなかのX』）とも呼んだ評伝の世界に迫った。遠藤文学における小西行長像の変化や、登場人物の行動とその結果が歴史的事実として示されているなかでいかに文学世界を描き出したか、モチーフの問題やフィクションの内実といった観点から論じている。

そして第四部は「歴史群像」と呼ばれる、遠藤の作品史でも終末期にあたる『女の一生』や『宿敵』『王の挽歌』『女』について、その複雑な構造を読み解いていく。ここで特に鍵となるのが「二項対立」という図式である。また司馬遼太郎『坂の上の雲』や山本周五郎『赤ひげ診療譚』との比較により、「歴史小説」の第三期にあたるこの時期の作品群が、遠藤の人生観の集大成として表れていること、作家の「書きたい」という意思の表れであることが浮かび上がってくる。

第一部では、「歴史小説」の条件には妥当しないが、初期の作品群を取り上げ、遠藤文学における「手記」形式や「トポス」の重要性が論じられている。「手記」を書くことを歴史を残す行為として意味付け、初期作品からみられる手記形式が後の「「歴史小説」を生み出す原動力」となっていると指摘される。さらに著者は遠藤が堀辰雄から受けた影響にも言及し、遠藤自身の「日記」も創造の原点となっていたと、遠藤の創作と「手記」との関連にも触れている。「手記」の重要性、とりわけ「歴史」との連関を指摘した点が興味深い。

そして特筆すべきは、第二部から第四部にそれぞれ置かれている〈ペドロ岐部〉を取り上げた三つの章である。遠藤文学の主題の一つである「弱者」の問題は、遠藤文学を論じるうえでは避けることができない問題である。本書では、遠藤文学における「強者」である〈ペドロ岐部〉にスポットを当てている。著者は「光がなければ闇も存在しないように、遠藤がいくら「弱者」に関心を持ち強調したとしても、「強者」がいなければその存在は曖昧なものとなる。その意味で「弱者」の対照としての「強者」である〈ペドロ岐部〉の存在は、遠藤にとって特別な地位を占めていたはずである」（一一六頁）とし、「強者」である〈ペドロ岐部〉が遠藤の作品にいかなる影響を与えているのかを検討した。遠藤は自身で作品について語ることが多く、これまでの作品論も遠藤の言説に引きずられる形で展開されてきた。作者の言説の逆を見るような本書の着眼点は注目すべきであろう。

また、〈ペドロ岐部〉が登場しない『沈黙』についても〈ペドロ岐部〉の影響が指摘されている。本書によれば、『沈黙』の主人公であるロドリゴの経歴や日本への旅路は〈ペドロ岐部〉が下敷きとなっているという。ここから、作品冒頭では「強者」の姿をしていたロドリゴが、後半では踏み絵を踏む「弱者」へと変化するという『沈黙』の新たな解釈が可能になる。関連する新たな史料も提示されている。『沈黙』の最後に引用される「切支丹屋敷役人日記」についてである。従来の研究では「査祇余録を抜粋し書き直した」（『沈黙』あとがき）という遠藤の言説がそのまま受け入れられてきた。しかし本書では、『沈黙』と『査祇余録』の間にさらに『江戸切支丹屋敷の史蹟』を置くことができるという。いずれも著者の、作者の言説にとらわれないユニークな着眼

点と、詳細で幅の広い史料研究の成果である。

本書では、すでに述べた通り遠藤文学を四つの時期に分け、それぞれについて個別に分析を行っている。そして、すべてを読み終えたときには、「歴史小説」という観点からみて、遠藤文学の一つの流れをみることができる。すなわち、第二部「切支丹物」では「強者」と「弱者」という二項対立の問題をとらえ、つづく第三部では「評伝」を通じて「西洋と日本」という対立をどのように描くかが検討される。そして第四部においては二項対立がさらに複雑に絡み合って「歴史群像」の世界を作っていることが指摘される。「強者」と「弱者」という二項対立が拡大した問題が第三部で示され、それをさらに多層化・多面化して描かれているのが第四部の「歴史群像」の世界なのである。もちろん「歴史小説」への「序章」として扱われている初期作品群のテーマも、「西洋と日本」すなわち西洋と非西洋という二項対立が根底にある。初期作品に表れていた問題が少しずつ形を変えながら「歴史小説」の中で提示されなおしてきたことは、初期作品と「歴史小説」の連続性を意味する。

そしてこれらの問題は、第一部で示された「手記」という形式や、作品舞台（＝トポス）によって劇的に描き出されている。このように「歴史小説を視座として」遠藤作品を捉えなおすことは、現実を出発点としながらどのように小説がつくられているのかという、遠藤の創造の営みを解き明かす一助となるだろう。

ところで、本書の「序論」で、著者は遠藤の〈歴史〉観を〈体験〉〈関心〉〈趣味〉の三つに分けた。〈関心〉としての〈歴史〉とは、遠藤が特に関心を抱いていた「キリシタン時代」のことである。そして〈趣味〉としての歴史とは、遠藤の〈歴史〉に対する深い愛着を指すものであり、この〈歴史〉への愛着とは人間の人生への深い関心に通ずると論じられている。

本書の「歴史小説」の定義の一つに「遠藤が定義するキリシタン時代を背景とすること」が挙げられている。本書で主に問題とされている〈歴史〉とは、遠藤の〈関心〉としての〈歴史〉であるといえよう。「歴史小説」の定義の五つ目に「ジャンルは問わない」とあるため、〈関心〉としての〈歴史〉を扱った作品を幅広く検討することが可能になっている。〈関心〉としての〈歴史〉、〈趣味〉としての〈歴史〉に関する作品への検討は本書でも詳細になされているといえる。

今後さらなる検討が期待されるのは、〈体験〉としての〈歴史〉に関してであろう。「序論」では遠藤の「戦争体験は『アデンまで』『白い人』『黄色い人』『海と毒薬』など初期の作品に色濃く反映している」（五頁）とあるが、〈体験〉としての〈歴史〉が反映されている作品は初期作品にはとどまらない。本書の「歴史小説」の定義には含まれないかもしれないが、「歴史小説」第二期において遠藤が「評伝」という形式をとるきっかけになったという『死海のほとり』には、戦争の記憶が重要なモチーフとして描かれている。長編にかぎらず短編作品群の中にも、戦争の記憶の影響が指摘できるだろう。これらの作品と〈体験〉としての〈歴史〉はどのように関連しているのだろうか。本書の方針を受け継ぐ形で、遠藤が〈歴史〉からどのように作品を創っていったかを検討する作業が求められる。

本書が新たに提唱した遠藤文学における〈歴史〉の問題を引き継いでいくこと、また「手記」などの形式や「トポス」にまで視野を広げることによって、「歴史小説」のみならず、遠藤の作品全体を新たに読み解きなおすことが可能になるだろう。

〔二〇一八年二月、和泉書院、本体五五〇〇円〕

（こしだ　さおり／富山県立となみ野高等学校教諭）